

機関番号：33918

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830140

研究課題名（和文） 福祉系高校における職業と大学への接続

研究課題名（英文） Connecting the high school Welfare courses to Institutes and universities

研究代表者

岡 多枝子 (OKA TAEKO)

日本福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：30513577

研究成果の概要（和文）：福祉系高校生と卒業生及び教員への調査から、福祉の目的が明確な生徒は授業や実習に意欲的であり、福祉系の就職や進学を選択して社会福祉分野で中核層を形成していることが明らかになった。福祉系以外に進んだ生徒も高校福祉教育の意義を評価していた。従って、福祉系高校では生徒の個性や高校タイプ及び地域性に配慮して、高校教育と大学教育の接続性や地域との緊密な連携を図る事が重要である。

研究成果の概要（英文）：A survey for high school graduates and the faculty of welfare showed that the graduates with a clear objective were more enthusiastic about the class and the practice, which led to finding employment, going on to another school of the welfare system and building a general career in the social welfare field. Students who did not go into the social welfare field were able to evaluate the meaning of the high schools welfare education system. Therefore, it is important to promote close cooperation and connectivity between the high schools and universities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	740,000	222,000	962,000
総計	1,340,000	402,000	1,742,000

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：福祉系高校 学校から職業へ 高大連携 接続教育プログラム 先進国調査

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の視点

本稿で研究対象として取り上げるのは、日本の社会福祉学教育・研究における教育機関の中核と位置づけられている福祉系高校（本稿では介護福祉士養成高校や福祉教育を行う高校を総称して福祉系高校と呼ぶ）に在籍する高校生と卒業生、福祉系大学に在籍する大学生、福祉系高校教員である。社会福祉サービス利用者の生命と生活の質

(QOL)を支える社会福祉従事者の慢性的不足と高い離職率、介護の「再家族化」は、高齢者虐待など日本社会の深刻な課題となっている。社会福祉従事者の不十分な労働環境やネガティブイメージの影響を受けて福祉離れが進み、福祉系大学の入学者数や卒業後福祉系進路を選択する者の減少等、社会福祉従事者養成の根幹を揺るがす事態も進行している。社団法人日本社会福祉教育学校連盟によれば、福祉系大学などにお

ける卒業生の「福祉職離れ」も加速している。また、海外からの介護士受け入れなどケアのグローバルチェーン化が進行する中で、福祉現場においても多文化共生社会の創造に向けた新たな取り組みが求められている。とりわけ社会福祉従事者の質的・量的担保と養成システムの再構築は喫緊の研究課題であり、高大接続福祉教育もまた新たな段階を迎えようとしている。こうした中で、福祉系高校生および福祉系大学生が高校時代にどのような進路選択経験を持ち、その進路選択への満足度はどの程度であるかを検討することは、キャリア形成や就業力を培う高大接続福祉教育や、教養としての福祉教育を検討する上でも重要な視点であると考えられる。

(2) 福祉系高校を巡る課題

日本の高齢化率は2008年に22.1%を記録して世界最高となり、ターミナルケアや認知症への対応をはじめ質の高い社会福祉サービスの提供が求められている。しかし、日本の社会福祉専門職養成は深刻な課題に直面し、福祉系大学卒業生の「福祉職離れ」も加速している。「社会福祉士及び介護福祉士法」改正を審議する社会保障審議会においても、福祉現場の労働環境や待遇の悪さが社会福祉専門職の離職に拍車をかけているとの指摘がなされた。社会福祉専門職の不足は、要介護高齢者や障害者のQOL低下、不況下に雇用の場を失った人々やホームレス、ネットカフェ難民、児童虐待や犯罪被害者へのケアなど、今日的で複合的なニーズに対応する社会福祉サービスの欠乏を招く恐れがある。

一方、同審議会では、福祉系高校卒業生の福祉分野における離職率が低いことが報告された。卒業後の進路は福祉分野が67.3%(2006年3月卒業生)、福祉分野の離職率13.5%(2003年4月就職者の2006年9月時点における値)は、高卒者全体の離職率49.8%(2003年4月就職者の2006年3月時点における値)に比較して低いことが特長とされる(文部科学省「2006社会保障審議会福祉部会資料」)。同審議会では、これら福祉系高校卒業生が地域福祉の一翼を担っていることを評価する意見も出された。青年期の早期離退職やニート・フリーターが社会問題化する中で、福祉系高校卒業生の継続就労は注目に値する。議論の対象となった福祉系高校は日本の社会福祉学教育における教育機関に位置づけられ(日本学術会議第18期社会福祉・社会保障研究連絡委員会「社会福祉・社会保障研究連絡委員会報告『ソーシャルワークが展開できる社会システムづくりへの提案』2003添付資料I)、2009年度現在、介護福祉士養成高校を

はじめ約9万人の高校生が福祉を学んでいる。

(3) 福祉系高校から職業と大学への接続

福祉系高校の創設は、文部省(当時)が理科教育及び産業教育審議会に対して「高等学校における今後の職業のあり方について」の諮問を行い(1981年)、同審議会が、高齢社会の進展に対応する課程として高校に「福祉科」を設置する必要があるとの答申を行った(1985年)ことにはじまり、産業教育の改善に関する調査研究協力者の福祉科部会が、高校福祉科設置による福祉教育の意義に関する提言(1987年)を行ったことで具体化されていく。提言の中で高校福祉科のタイプは、「専門的な職業人の養成をめざすタイプ」と、「社会福祉関係の高等教育機関への進学をめざすタイプ」の2つのタイプとして提示され、同年の「社会福祉士及び介護福祉士法」制定において、福祉系高校が介護福祉士養成ルートに位置づけられたことにより全国的な福祉系高校開設へとつながっていく。高等学校学習指導要領改正により2003年度に高等学校教科「福祉」が創設され、2007年「社会福祉士及び介護福祉士法」改正に伴い高等学校教科「福祉」のカリキュラムや教員要件も大幅に改正された。しかし、厚生労働省・文部科学省を中心とした30年にわたる福祉教育政策の改編では、当初に示された福祉科の2つのタイプに対する評価や言及はみられない。福祉科の姿として提示されて全国の福祉系高校がモデルとした2つのタイプは、実際に生徒の進路としてどのような形で具現化されているのか。これらの検証は、日本の学校教育史に「福祉」教科が導入されたことに対する政策的適合性を検証する観点からも、また今後の社会福祉教育を展望する意味からも重要な意義を持っていると考えられる。

2. 研究の目的

福祉系高校における職業と大学への接続について新たな知見を得る。

3. 研究の方法

福祉系高校の生徒及び卒業生、教員、福祉系大学生に対する調査を行い、詳細な検討を行う。

- (1) 福祉系高校生アンケート調査Aの分析
- (2) 福祉系高校卒業生アンケート調査Bの分析
- (3) 卒業生へのインタビュー調査Cの実施と分析
- (4) 福祉系高校教員インタビュー調査Dの実施と分析
- (5) 海外における高校の職業教育に対する実地踏査

4. 研究成果

本研究では、福祉系高校における職業と大学への接続を検討することを目的として、福祉系高校生アンケート調査A、福祉系高校卒業生アンケート調査Bの分析、卒業生へのインタビュー調査C、福祉系高校教員インタビュー調査Dの実施と分析を行った。その結果、①福祉系高校生の大半が幼少期以降の福祉的体験を背景とした明確な福祉への目的意識を持ち、②能動的・内省的な実習経験や適切な実習指導が福祉分野への進路選択に及ぼすこと、③実習不安への不十分な事前指導やリアリティショックへの不十分な事後指導が進路変更を招くこと、④地域性（大都市圏と中核都市圏、農村部圏）が進路選択や学校生活への満足度に影響を与えていることが明らかになった。

進路希望の変更時期は、どの属性においても2年実習後から3年実習前の期間で最多であり、実習後のリフレクションによる再学習が重要な意味を持っていると考察された。

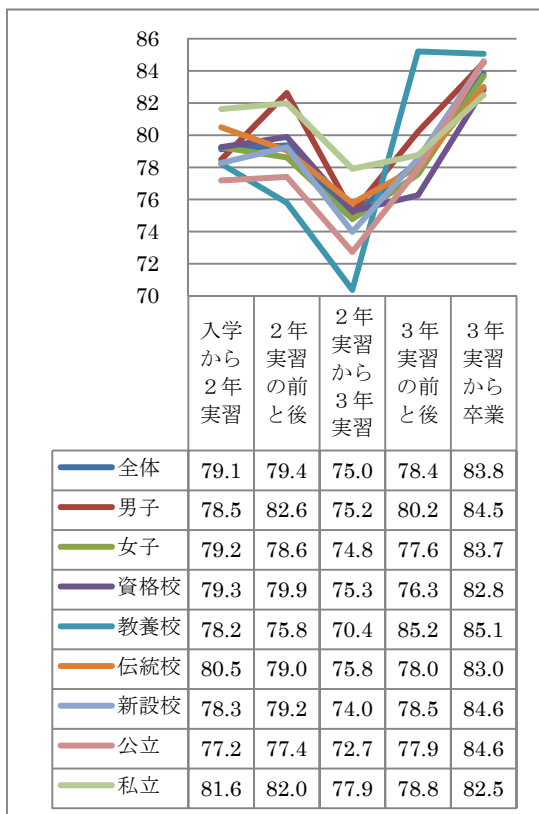


図1. 福祉系高校生の属性別進路維持率

また、福祉系高校在籍中に介護福祉士資格を取得し、福祉系大学へ進学して社会福祉士や高校福祉科教員免許等を取得した者が、福祉分野や福祉教育分野での新しい中核層を形成していることも明らかになり、福祉系高

校卒業後直ちに職業（介護従事者等）へ接続する者と、大学への接続を経て職業（相談員・公務員・福祉科教員等）へ接続する者との二重構造が示された。以上の結果から、福祉系高校卒業生の福祉分野における長期にわたる定着率の背景となる福祉教育における、①入学動機の差異や性差等の生徒の個性に対する配慮、②資格取得や実習に対する高校タイプによる指導法の柔軟性とシステム化、③地域産業や高齢化率、交通網など地域性に対応した進路指導の対応が重要であるとの知見を得た。従って、福祉系高校と福祉系大学との緊密で継続的な高大接続教育（デュアルクレジットシステムや高校生と大学生との直接的な交流を含む）に対する連携と、地域の施設や機関との日常的な交流（ボランティア活動や実習指導を含む）の推進が極めて重要であるといえよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①岡 多枝子 2011「社会福祉系大学生の体験的学びとキャリア形成ー「つながる力」へのアプローチを目指してー」日本福祉大学研究紀要『現代と文化』査読あり 122号、61-74

②岡 多枝子 2010「高校時代の進路選択から見た高大接続福祉教育」日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 査読あり Vol.16 94-103

③岡 多枝子・三並めぐる 2010「福祉系高校生及び大学生のキャリア形成」日本福祉大学社会福祉論集 査読あり 123号/2010.9、127-139

④三並めぐる・岡多枝子・向井康雄「高校生の『健康観』形成と社会的背景ー健康標語の分析を通してー」教育保健研究（中国・四国学校保健学会）査読あり 第16号、91-100

⑤岡 多枝子 2010「大学における社会福祉教育としてのサービスマーケティング」ふくしと教育-査読あり 通巻7、40-45

〔学会発表〕（計5件）

①岡 多枝子 2010「福祉系高校におけるミクロレベルのレリバンスー入学動機と実習・進路選択の適合性ー」日本福祉教育・ボランティア学習学会第15回ぐんま大会、2010年11月29日

②岡 多枝子 2010「福祉系高校から福祉系大

学への接続－高校時代の進路選択と満足度－」日本社会福祉学会第 58 回秋季大会特定課題セッション, 2010 年 10 月 10 日, 日本福祉大学美浜キャンパス

③岡 多枝子 2010「日本福祉大学生のキャリア形成－高校時代の進路選択－」日本福祉大学社会福祉学会, 2010 年 5 月 30 日, 日本福祉大学名古屋キャンパス

④岡 多枝子 2010「私たちの社会変革－サービスマーケティングからソーシャルアクションへ－」浙江大学公共管理学院社会保障・公共政策研究所学術交流会, 2010 年 3 月 24 日, 中国杭州

⑤岡 多枝子 2009「福祉系高校における生徒の「レリバンス」とキャリア形成」日本福祉教育・ボランティア学習学会全国大会, 2009 年 11 月 29 日, 日本福祉大学名古屋キャンパス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡 多枝子 (OKA TAEKO)
日本福祉大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：30513577